

“天神さま”とは・・・？

“天神さま”の名で親しまれる菅原道真は、平安時代前期を代表する学者・政治家でした。幼いころから非常に優秀であった道真は、官僚候補生に漢文学を教える文章博士やいくつかの役職を歴任し、ついに右大臣に任命されます。

しかし学者としては異例の出世であったため風当たりが強く、左大臣・藤原時平の策略により、突然都から大宰府へ左遷されてしまいます。そうして失意のうちに、58歳で大宰府の地で亡くなるのです。

道真の没後まもなくして都には異変や災害が相次ぎます。これは道真の怨霊のせいであるとして、祈りを捧げたのが天神信仰のはじまりとなりました。やがて各地に天満宮が作られ天神信仰は広まり、現在よく知られる学問・試験の神として祀られるなど、神としての姿はさまざまに変化、発展していきます。中でも天神人形は、学問の神・子どもを守る神としての天神信仰の浸透を示すものと言えるでしょう。



いろいろな天神人形



※展示作品

五色天神

主に江戸時代後半頃、子どもたちの玩具として愛されていました。その後姿を消しましたが、1970年に商家から発見された型を使い復原され、現在でも作られています。

立天神

座った姿のものは“居天神”として家督を継ぐ長男に贈られ、立ち姿のものは家を立ち去る次男や三男に贈られたという言い伝えがあります。このような立ち姿は、絵巻物に描かれる、山上で祈りを捧げる天神さまの姿を基にしているという説があります。



松江につたわる天神人形

平成29年2月17日(金)～4月19日(水)

天神人形とは、没後千百年にわたり“天神さま”として信仰を集めてきた、菅原道真を象った人形です。

松江には、男の子が道真にあやかり賢くなるように、すこやかに成長するようにと願い、雛の節句(旧暦4月3日)に天神人形を飾る風習があります。女の子は雛人形を飾りますが、男の子は母親の実家や親類から贈られた天神人形を飾ります。

今では、石膏などで作られた顔に衣装を着せた“衣装天神”が一般的ですが、江戸時代後期から明治・大正期にかけては、顔も衣装も土で作られた“泥天神”が飾られていました。全国各地でさまざまな種類が作られましたが、松江・出雲で作られたものは、ほっそりとした顔に長い首、切れ長の目が特徴で、特に美しいと言われています。

本展示では、道真が亡くなった2月25日と雛の節句の時期にあわせて、松江の民家で飾られていた“泥天神”たちをご紹介します。

出雲地方で作られた泥天神



横浜天神



加茂天神

※展示作品



今市天神

※展示作品



沖之洲天神

泥天神とは・・・？

泥天神は、京都・伏見で作られていた土人形が源流と言われています。土人形には、願い事や病気厄除けなど庶民の暮らしをとりまく様々なモチーフがとりあげられますが、江戸時代後期にはすでに学問の神さまとして庶民の身近にあった“天神さま”もとりあげられ、泥天神が生まれます。

出雲地方の泥天神

出雲地方では、1800年頃、まつだいらふまい松平不昧が藩主だった時に泥天神が作られはじめたと言われています。つやのある真っ白な肌、ほっそりとした顔、長い首、切れ長の目が特徴で、全国的にも特に美しく、品格のあるものと言われています。

作り方

木型に土を押し付け、胴体が空洞になるように前後の型をつけます。土を乾かした後、素焼きする所までは他の地方と同じですが、出雲地方では、素焼きの後全体に胡粉こふん（貝殻で作った白色の顔料）を塗り磨く工程を何度か繰り返し、彩色します。出雲地方特有のつやのある真っ白な肌はこうして作られたのです。



天神人形の型

出雲地方の産地

出雲地方にはいくつか泥天神の産地があります。横浜よこばま（松江市）や加茂かも（雲南市）で作られたものでは、赤い衣装の泥天神がよく知られています。また、いまいち おきのす今市や沖之洲（いずれも現在の出雲市）では、白い衣装の泥天神がよく知られています。

